

ローマ法王フランシスコ 11月に長崎訪問の意向

厳しい禁教令の下、長崎では潜伏したキリシタンが密かに信仰を守ってきた。そうした信仰にまつわる集落や施設が2018年、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産に登録された。関係地には多くの人々が訪れ、観光スポットとして注目されている。

12ある構成資産のうち、長崎市の大浦天主堂をのぞく11の構成資産は離島や半島などに点在している。当然、交通アクセスが悪い場所が多いが、登録が決まった昨年7月から12月までの来訪者は49万9千人に上っている。この数は前年同期より58%、18万3千人も増加している。記録的な猛暑に見舞われた7、8月に限っても前年同期を54%、5万5千人上回る15万9千人が訪れており、多くの観光地が苦戦を強いられる中で世界遺産効果は顕著だった。

登録へ向けて国連教育科学文化機関(ユネスコ)の諮問機関、国際記念物遺跡会議(イコモス)の審査を受ける過程で、構成資産から除外された教会なども来訪者が増えるなど波及効果は多岐に及んでいる。

ただ、登録効果は長くは続かない。各地区とも一時のブームに終わらせまいと、史料館を開設したり、構成資産を上空から眺めるヘリコプター遊覧クルーズを企画したりするなどPR戦略を練っている。

そうした中、ローマ法王フランシスコが11月にも長崎を訪問する意向を示した。長崎にすれば潜伏キリシタン関連施設を訪れる可能性もある。世界のカトリック信徒を束ねるローマ法王が訪れることになれば、世界遺産登録時と同様に、全国、いや世界から脚光を浴びることになりそうだ。

長崎新聞社 編集局次長兼報道部長 永瀬徳豊



- 写真左：世界遺産登録が決まり、観光客でにぎわう大浦天主堂＝長崎市南山手町
- 写真中央：「島原・天草一揆」で約3万7千人が立てこもった原城跡＝南島原市南有馬町
- 写真右：春日集落の棚田を撮影する観光客ら＝平戸市春日町